



5年後への期待

林産試験場、林業試験場が森林研究本部という一つ屋根の下に入ったことによる変化の一つとして、研究職員の交流が行われるようになったことがあります。今までのところは、林産試験場から林業試験場への一方通行ですが、第Ⅰ期5年間で6名。かく言う私もその一人で、2年間、林業試験場の研究に係わる機会を持ちました。「林業機械が働く造材の現場を私自身の目と耳で感じ、林業と木材産業との係わりについて若干ながらも想いを巡らすことができた幸せな2年間」というのが、林業試験場を離れるに際しての感想でした。

その一方で、「両試験場の置かれた位置、研究の方向には異なる部分がある」ように感じたことも事実でした。研究対象である森林資源を材料・原料と見るのか、生物・なまものとして扱うか、視点の違いによるのかもかもしれません。

しかし、私の個人的な感想は別として、林業試験場と林産試験場は、この5年間、戦略研究「森林循環」を通じ、森林資源を素材生産から木材加工そして建築物への利用という一貫した流れの中で考え、共に成果を出してきました。戦略研究「温暖化農林業」においては、森林バイオマスについて資源量把握、収集・加工そしてエネルギー利用までをやはり一貫した流れとして取り組み、現在進めている戦略研究「エネルギー」でさらに研究を深めることになるでしょう。例にした戦略研究に限らず、両試験場の研究職員が頻繁に行き来することで得られた成果が、本誌で紹介されています。

これからも、さまざまな研究分野で両試験場が結び付くことによって優れた成果が生み出されるのが期待されます。

1970年の林産試験場設立20周年記念誌に、設立当時の林務部長は、「林業と林産業は一体である、すなわち森林産業—フォレスト・ビジネスとして考えるべきである」と述べています。

それから45年がたちました。あらためて、林業と林産業が一体となった森林産業—フォレスト・ビジネスの振興、を基本に置き、私自身も含め、第Ⅱ期に向かっていきたいと思います。そして、5年後、森林産業を具現化する成果が豊富に盛り込まれた選集が実現していることを確信しています。

林産試験場長
菊地 伸一

